

東京大学大学院 学 ○窪田 陽一

東京大学大学院 学 細川 政弘

□ 序説 ——— 本研究は、面的・空間的広がりとしての地域の景観的特性の把握に関する方法論的並びに認識論的な研究であり、イメージを媒介とした景観の記述と分類にその主眼を置いている。換言すれば、地域景観の認識モデルを構築することである。これは、一見千差万別に展開する景観の中に存在すると考えられる、意味や価値の多義性・多様性を超えた構造を客観的に分析・解明する作業でもある。

この様な研究は、画一化・均質化の進む一方で混沌・秩序崩壊が進行するという現代の景観の持つ問題性を的確に把握する上で有用な情報を与えるものとなる。画一化と混沌という両極的な現象は、状況的には各地域の Identity (個性・同一性) の喪失としてとらえることができる。これは一言で表わせれば地域の平準化であり、必ずしも景観の側面に限定されないが、地域性への関心の低下が究極的に景観に表われていることは疑う余地がない。即ち、地域の景観的特性に対する考慮の欠陥が招いたのが今日の景観の状況であろう。また、地域の Identity の問題は地域環境の人間性の問題にも関わってくる。Identity とは裏を返せば Difference (示差性・差異性) の問題であり、地域内の各部分の領域性が明確に生活者に意識されなければ、人間の生活空間としては混沌としたものでしかないであろう。それ故、生活者の眼を通して地域景観の状況の把握を試みることは、方法論的にも重要なことであると考えられる。景観の差異は計画・設計によって操作的に生み出し得るものであり、Identity との関連性が構造的に明らかにできれば、基礎資料としての価値は十分にあるものと思われる。

本研究においては諸般の事情から、対象地域としては東京都内という広域を扱い、景観としては歩行者の視点から見た街路景観に限定した。従って、最終的に得た認識モデルはマクロ的なスケールにおける都市地域に関するものであることをおこしわりしておく。

□ 地域イメージの構造 ——— 地域の Identity を反映する形で人々の脳裏に描かれると思われる「地域イメージ」は、個人毎に異なることや対立するイメージを与える要因が同一地域内に混在している場合も考えうるが、頭の中に描く際に常に基礎となる普遍的な観点が存在するものと思われる。都内の地名13カ所ずつ2グループを各々30名ずつの相異なる回答者群に提示し、35組の形容詞対を用いたSD法によるアンケートを行ない、因子分析法・Eckart-Youngの分解・三相因子分析法を適用した結果、いずれのグループにおいても「空間の様相」「活動性」「評価」の三つの観点から地域イメージが基本的に構成されることが示された。「空間の様相」の因子の存在は、地域イメージを描く時、その地域で見られる何らかの景観を想起していることを示すものと考えられる。

□ 地域イメージと景観の対応性 ——— 地域イメージの中核となる景観を抽出するための分析を行った。都内の地名20カ所ずつ2グループを各々20名ずつの相異なる回答者群に示し、40枚の街路景観のスライド写真の中から「イメージが似ている」ものを多選法で選んでもらい、回答頻度を得点とする地名×スライド写真の行列にEckart-Youngの分解を適用した。各地域の分布パターン(FIG-1.1, 2.1)とスライド写真の分布パターン(FIG-1.2, 2.2)とは各グループ共に実によく対応している。更に、各パターンはいずれも三角形の中に収まり、また、Aのパターンを約45度回転させるとBのパターンにほぼ一致する。これらの事実は、地域イメージの形成に寄与の大きい代表的街路景観の存在を示していると同時に、丁度人間の性格類型のように、街路景観の類型は少なくとも三つの極を基準として位置付けられるのではないか、即ち、地域の Identity の一表現形としての街路景観にはマクロ的に見て少なくとも三つの典型が存在するであろう、という仮説を示唆するものと考えられる。

分析Ⅰ    72枚の街路景観のスライド写真を33名の回答者に提示し、9組の形容詞対を用いたSD法による心理実験を実施し、因子分析法・Eckart-Youngの分解・三相因子分析法によって街路景観の布置パターンを求めた。

分析Ⅲ 街路景観のスライド写真8枚を選出し、一対比較法により各写真間の非類似性の度合を11段階(10:「全く似ていない」～0:「同一である」)で2名の回答者に判定させ、非計量的多次元尺度構成法(KruskalのMDSKAL)を適用して各写真の空間配置を求めた。(FIG-4)

□ 結語 — 現存する多種多様な街路景観を寺がかりに、地域の景観の特性を把握するためのマクロ的な認識モデルを導出することができた。これらの極が主要な都市計画思潮とも重なり合っていることは、大変興味深い。今後は、評価者の属性を考慮した、価値観との対応性の分析や選好性の分析、更に環境設計技法への展開等を念頭においた研究が必要となろう。

Tucker, L.R.: Some Mathematical Notes on Three-mode Factor Analysis, *Psychometrika*, Vol. 31, No. 3, Sept., 1966.